

ロンドンオリンピックに出場して (柔道 100kg 超級)

保科 知彦 教育学研究科 健康スポーツ系教育専攻



この度、ロンドンオリンピック競技大会柔道競技 100kg 超級にフィリピン代表として出場しました。父が日本人、母フィリピン人という複雑な家庭環境で育ってきた私は、幼い頃から夢であったオリンピックに出場できたことは、大変名誉なことであると感じております。また、ロンドンオリンピックに出場できたのは、応援していただいた皆様のおかげです。とりわけ、恩師である木村昌彦教授（教育人間科学部）には、ロンドン現地でも大変お世話になり、感謝の気持ちでいっぱいです。

出場にあたって、2010 年から私が所属する研究室においてオリンピック出場に向けた支援体制が立ち上がり、先輩や在学生の皆様から多くの経済的な支援をしていただきました。この横浜国立大学のつながりこそが、オリンピック出場にあたって、最も重要であった出来事であったと考えます。フィリピンナショナルチームの強化費は限られたもので、オリンピック出場のためには、数々の国際大会参加が最低条件となります。その中で各階級、世界ランキング 22 以内、各大陸（アジア、ヨーロッパ、アフリカ、パンアメリカ、オセアニアの五大陸）で上位ランキング内の国を除外し、その中から大陸ごとに男女全階級含めて約 20 名の選手が選出されます。そして、私はアジア大陸枠によって、ロンドンオリンピックの出場権を得ることができました。今回、このような厳しい選手選出方法の中から選ばれたことは、多くの国際大会に出場し、出場に必要なポイントを獲得できたからです。このような数多くの国際大会出場の機会くださったのは、木村昌彦教授をはじめとする研究室の支援体制があったからだと思います。本当に、感謝の気持ちで一杯です。

オリンピックの現地にて試合当日までは、午前中に試合会場で調整練習を行い、午後は試合観戦後、選手村の内で試合に備えて休息を取り、サウナや冷水を浴びたりして、血行を良くし、疲労を残さないように工夫していました。また、様々な国々の選手と練習を行いました。私のように、出場選手が少ない国々の選手と合同練習会を行い、試合直前まで共に稽古に励みました。グアム、アメリカサモア、バーボラス、バヌアツ、北朝鮮、パラオ、たくさんの国々の選手と交流をすることができ、スポーツを通じて、国際共生や異文化理解を学びとても良い経験をすることができました。

柔道はオリンピック競技の中でも注目度が高いスポーツで、チケットもすべて完売というだけあり、会場の雰囲気はとても盛り上がっていました。また、私自身、何度か国際大会に出場してきましたが、オリンピックの雰囲気はまったく別物でした。特に、オリンピックの金メダルを取った瞬間を生で見られたことや、同じ舞台に立てると言うことは、名誉あることだと思っています。初戦がワールドカップで、優勝経験のあるキム・ソンミン（韓国）選手で実力者なだけあって、どのようにして戦おうかを考えてアップ会場で待機していました。緊張、不安、期待、喜び、いろいろな気持ちが混ざった心地よい感覚でした。結果として一回戦、払い腰で一本負けをしてしまいましたが、オリンピックの舞台に立てたことは、本当に幸せでした。そして、このオリンピックに出場できたこの経験を今後の教師生活に役立てていきたいです。そして、私自身が生きる教材となり、スポーツを通しての国際共生や、異文化理解を伝えていくことが使命であると思っています。